

清少納言の身分意識

—特に「小白河の八講」の藤原道隆をめぐる—

安東大隆

はじめに

清少納言は、周知のように、清原深養父を祖父に、元輔を父に持つ、才女である。

深養父・元輔は、歌人として、その名が、よく知られている。清少納言は、歌については、得意では、なかつたらしい。

清少納言の、人となりに、ついて、藤岡作太郎氏は、その著『国文学全史・平安朝篇』の中で、『枕草子』にみえる、彼女の自讃の記事を、列挙した後に、

多くの記事は自讃に充ちて、清少納言が驕慢の性を表わせり。その自讃は概ね己が学識に關し、その艷容麗色に誇るが如きことは、殆ど見るべからず。思うに清少納言は蛾眉朱唇、花の姿あるにあらず、もとより和泉式部が大幣の引く手数多なる類にもあらず、御堂殿に音なわる、紫式部にも及ばず、鏡中の影に山鳥ならぬ木菟の、己が姿を喜ぶ能わざりしなるべし。

と、その容色や、性質について、和泉式部や紫式部を、引き合いに、出して、言及して、おられる。今日においても、清少納言は、紫式部に、比較して、高慢な女性、というような評価が、一般的かと思う。

さて、『枕草子』の中で、自画自讃しながら、自由闊達に、人を、批評していたと、うけとられている、清少納言は、その周囲に、居る人

に、対して、その人の身分によつて、評価・批評に、違いを、持たせていたか、否かを、考えて、みたいと思う。それは、清少納言が、ものを考え、判断する基準に、相手の身分の尊卑が、影響を、与えていたかどうかと、いうことである。

(一)

『枕草子』の、小白河の八講の段(三十五段)^②には、小一条の大將濟時の、小白河殿で、おこなわれた法華八講に、参列した、貴族達の様子が、詳細に、書かれている。特に、その服装に、關する描写は、細微である。その貴族達の中で、当時の三位の中將、藤原道隆についての記述が、目をひく。即ち、

すこし日たくるほどに、三位の中將とは関白殿をぞきこえし、かうのうすものの二藍の御直衣、二藍の織物の指貫、濃蘇枋のしたの御袴に、はりたるしろきひとへのいみじうあざやかなるを着給ひて、あゆみ入り給へる、さばかりかるびすずしげなる御中に、あつかはしげなるべけれど、いとみじうめでたしとぞ見え給ふ。(77頁)

の一節である。『春曙抄』では、この箇所を、
外の上達部は浅黄の帷子をすかし白き袴など涼しげなる中にも、道隆公の出立あつかはしからでめでたしとなり

と、解説している。

他的上達部は、「さばかりすずしげなる」様子を、している中で、道隆の服装を、見ると、本来ならば、暑苦しく、感ぜられそうなものであるが、かえって、すばらしくみえると、清少納言は、道隆についての、感想を、述べている。さて、そこで、疑問に思うのは、六月に、暑苦しい服装を、している、道隆を、清少納言は、なぜ、本来とちがって、「いみじうめでたし」と、受け取ったので、あろうか。更に、言葉継ぐと、もし、道隆でなくて、もつと身分の低い人であったら、はたして、「いみじうめでたし」という感想が、聞けたかという、疑問である。以下、その疑問について、具体的に、考えてみたい。勿論、清少納言の、仕えた中宮が、定子であり、道隆は、その定子の父で、あることを、考えると、当然とも、言えるかも知れない。

(二)

まず、中の関白藤原道隆であるが、この人は、天曆七年(935)に、兼家の長男として、生れ、長徳元年に、四十三歳で、薨じた。その家柄の良さも、あつてか、摂政や関白を、歴任している。その官職の大概は、『尊卑分脈』や『公卿補任』の、説くところである。

『大鏡』の道隆伝を見ると、賀茂詣の逸話を、引いて、その上戸ぶりを、のべている。しかし、反面、覚めるのも、早いようである。下賀茂から、上賀茂へ行く間、牛車の中で、泥酔して眠っていた道隆は、上賀茂に着くと、身仕度を、整え直して、下車する。

おりさせたまひけるに、いささかさりげなくて、きよらにてぞおはしましし。されば、さばかり酔なん人は、そのよは、おきあがるべきかは。それに、このとの、御上戸は、よくおはしましける。(175頁) 道隆の死因を、『大鏡』の作者が、「御みきのみだれさせ給にしなり」(175頁)と、記述しているのも、うなずけよう。

又、道隆は、

○中納言どの、御容貌も心もいとなまめかしう、御心ざまいとうるはしうおはす

○御かたちぞ、いときよらにおはしまし、はや

と、あることによつて、容貌が、端正なもので、あつたことが、知られる。他の文献にみえる、このような道隆は、『枕草子』では、どうとらえられて、いるであろうか。そこで、『枕草子』の中で、他の、道隆に関する記述箇所、主なるものを、列挙すると、次のようである。○円融院の御治世に、「草子に歌ひとつ書け」という、院の注文に、困惑して辞退する人も、あつたが、道隆は、

しほのみついづもの浦のいづもいづも君をばふかく思ふはやわがといふ歌のすゑを、「たのむはやわが」と書き給へりけるをなん、いみじうめでさせ給ひけるなどおほせらるるにも、すゞろに汗あゆる心地ぞする。(61頁)

○淑景舎(道隆の二女原子)が、中宮定子の御殿に、おわたりになつた時の、道隆の様子は、

殿は、薄色の御直衣・萌黄の織物の指貫、紅の御衣ども、御紐さして、廂の柱にうしろをあてて、こなた向きにおはします。めでたき御有様を、うちゑみつ、例のたはぶれごとさせ給ふ。(61頁)

○関白殿、黒戸より出でさせ給ふとて、女房のひまなくさぶらふを、「あないみじのおもとたちや。翁をいかにわらひ給ふらん」とて、分け出でさせ給へば、戸にちかき人々、色々の袖口して、御簾ひきあげたるに、権大納言の御沓とりてはかせ奉り給ふ。いとものものしく、きよげに、よそほしげに、下襲の裾ながく引き、所せくてさぶらひ給ふ。あなめでた、大納言ばかりに沓とらせたてまつり給ふよ、と見ゆ。山の井の大納言、その御次々のさならぬ人々、くろきものをひき散らしたるやうに、藤壺の唄のもとより、登花殿の前までみ並みたるに、ほそやかにいみじうなかめかしう、御佩刀などひきつくるはせ給ひて、やすらはせ給ふに、宮の大夫殿は、戸の前に

立たせ給へれば、ゐさせ給ふまじきなめりと思ふほどに、すこしあゆみ出でさせ給へば、ふとゐさせ給へりしこそ、なほいかばかりの昔の御おこなひのほどにかと見たてまつりしに、いみじかりしか。

(183頁)

○道隆が、法興院の積善寺で、一切経の供養をした時の、様子を、のべた個所でも、道隆に、ついでに、記事が、散見される。

△殿わたらせ給へり。青鈍の固紋の御指貫、桜の御直衣にくれなるの御衣三つばかりを、たゞ御直衣にひき重ねてぞたてまつる。(285頁)

△関白殿、その次々の殿ばら、おはするかぎり、もてかしづきわたしたてまつらせ給ふさま、いみじうめでたし。これをまつ見たてまつり、めでさわぐ。(294頁)

これらから、想定される、道隆像は、一族が、繁栄を極め、本人も、人臣を極めて居り、歌を、臨機応変によみ、冗談を、よく言い、立派な服装をし、申し分のない、実力者である。

(三)

さて、このように、「枕草子」の中で、描写されている、道隆像に対して、他の貴族は、どのように、描かれているで、あろうか。

道隆の、末の弟にあたる、藤原道長を、みてみよう。道長は、周知のように、一条帝の中宮、彰子の、父である。清少納言の、直接仕えた人では、なかつたが、一世を風靡し、権力を、恣にした人物である。

『枕草子』には、道長に関する記載は、すくない。先に、引用した、「関白殿、黒戸より出でさせ給ふとて……」の段(一二九段)にある、

「宮の大夫殿」以下が、道長についての、記述である。道隆が、歩いて、すこし出てくると、清少納言の、「ゐさせ給ふまじき」という予想に、反して、「ふとゐさせ給へりし道長を、見て、道隆の、宿世の高さを、思いやるのである。一見、道隆の、引き立て役を、道長が、務めていることになる。当時、道隆は、四十一歳で、関白であり、道長

は、二十七歳で、中宮大夫である。これは、勿論、年齢の差、官職の差が、基礎に、なっているものであり、一概に、両者を、同一の俎上で、論ずるわけには、いくまい。しかし、後に、道隆が、薨じて、中の関白家の方が、衰退していった時にも、道長のことには、触れていない。猶、道長は、道隆の、薨じた翌年、長徳二年に、左大臣に、補せられている。『紫式部日記』が、道長と彰子を、中心にした、御堂関白家の栄華を、叙述しているのと、あざやかな、対照を、示している。次に、中の関白家に、属する、道隆の二男、伊周の場合を、みよう。伊周は、天延二年(974)の誕生で、あるから、道長より、八歳の年少である。

「清涼殿の丑寅のすみの、北のへだてなる御障子は、」に、はじまる段(二三段)で、伊周の服装を

大納言殿、桜の直衣のすこしなよらかなるに、こきむらさきの固紋の指貫、しろき御衣ども、うへにはこき綾のいとあざやかなるをいだしてまゐり給へるに(50頁)

と、描写している。又、その伊周が、「月も日もかはりゆけどもひさにふる三室の山のと、ゆるやかな調子で、歌い出したのを「いとをかしよう覚ゆるにぞ」と、感想を、さしはさんでいる。

前述した、「淑景舎、東宮にまゐり給ふほどのことなど」の段(一〇四段)で、中の関白家の人々を

日一日、たゞさるがうことをのみし給ふほどに、大納言・三位の中將・松君(道長)めてまゐり給へり。殿(道隆)、いつしかいだき取り給ひて、膝にすゑ奉り給へる、いとうつくし。せばき縁に、所せき御装束の下襲ひきちらされたり。大納言殿はものものしうきよげに、中将殿はいとらうらうじう、いづれもめでたきを見たてまつるに、殿をばさるものにて、上の御宿世こそいとめでたけれ。(182~183頁)

と、賞讃している。こゝにも、清少納言の、中の関白家によせる、賞讃の気持を、読み取ることが、できよう。

「宮にはじめてまゐりたるころ」の段（一八四段）でも大納言殿のまゐり給へるなりけり。御直衣、指貫の紫の色、雪にはえていみじうをかし。（231頁）

と、雪に映えた、服装の色を、ほめている。又、積善寺での一切経供養の段（二七八段）で、牛車に、乗るべく、歩いていく、清少納言を、みている、伊周、隆家を、「車のもとに、はづかしげにきよげなる御さまどもして、うち笑みて見給ふもうつゝならず。」（233頁）と、のべている。

これらは、伊周についての、描写である。

以上、道長・伊周の二人を、見た。年齢や官職から、すれば、当然、道長についても、かなりの紙面を、さいてもよいはずだが、そうは、していない。こゝにある、清少納言の、意識の中心には、自分の仕えている、中宮定子を、支える、中の閑白家に対する、尊敬の念が、色濃く、映じられている。

（四）

「あはれなるもの」に、はじまる、御嶽精進のことに、言及した段（二一九段）の、一説に、藤原宣孝の、御嶽詣の服装に、ついて、のべた箇所がある。

御嶽詣を、する時には、普通の場合、地味な服装を、していくのであるが、宣孝は、その反対に

あぢきなきことなり。ただきよき衣を着てまうでんに、なでふことかあらん。かならず、よも、あやしうてまうでよと、御嶽さらのたまはじ（171頁）

と、言つて、「むらさきのいと濃き指貫、しろき襖、山吹のいみじうおどろおどろしきなどを」着用して、出かける。又、子供の、隆光にも、「青色の襖、くれなるの衣、すりもどろかしたる水干といふ袴」を着用させる。二人共、普通の人の、場合とは、違った、はでな服装をして、

出かける。御嶽詣の、行き帰りの人々も、珍らしく、不思議な例として、「この山にかゝる姿の人見えざりつ」と、奇異な目で、見ている。

この宣孝父子の、御嶽参詣の様子を、清少納言は、論評抜きで、これは、あはれなることにはあらねど、御嶽のついでなり。（172頁）と、事実のみを、御嶽詣のことを、記したついでに、のべたと、但し書きを、つけている。

猶、前田家本では、

これをかしきことにもあらず、めでたきことにもあらねど、たゞそのかみ耳にとまりしことをかきたるなりと、している。

さて、こゝで、前述した、小白河の八講の時の、道隆の様子を、想起してみると、その違いが、目につく。一方では、多くの、涼しい様子を、した人々の、中で、特に、暑い感じを、抱かせる、道隆の服装について、かえつてよいと、讃辞を、送っている。又、こゝでは、宣孝の様子を、事実として、ついでに、書き記したということ、さりげなく、叙述している。そこには、道隆と宣孝の、おかれて、身分の違いや、当時の、宮廷社会に、占めている、位置の重さの違いが、大きく、関与している。明らかに、身分による、相違が、存在していると、思われる。

他方、身分が、賤しくなれば、それだけ、清少納言の言葉は、熾烈になる。下衆の家には、雪の、降るのも、月の、さし入る事も、残念なことであつた、（四十五段）。更に、「をかしと思ふ歌を、草子に、書いて、おいたら、下衆が、それを、口ずさんだりした場合も、やはり、がっかりしている、（三二〇段）。若くよろしき男が、下衆女の、名前を、呼ぶ場合は、その名前を、よく知つていても、全部、いわずに、一部分を、よぶのがよいと、している、（五十七段）。雪や月の、風雅なものが、下衆の家に、降つたり、さし込んだり、するということにまで、言及して、下衆を、軽蔑している。

下衆の場合と、対照的に、貴人については、昼寝をして、起きた顔も、普通の人に、比較すると、「いますこしをかしかなれ」(一〇九段)という事になり、悪くいうまでには、到っていない。又、官職でも、美貌の貴公子が、彈正の弼に、いるのは、見苦しい、(四十五段)と、言っている。更に、すゝんで、中宮の動作に、なると、「ものしげなる御けしきなるも、いとをかし」(九十九段)と、不快そうな、様子を、しているのも、「いとをかし」と、把握されている。中宮が、御前の几帳を、押しやつて、長押のもとに、お出になつたのも、清少納言に、とつては、「なにとなくたゞめでたき」景色として、写っている、(二十三段)。無名という、琵琶の名前を、中宮に、尋ねた時に、中宮は、「たゞいとはかなく、名もなし」と、答えている、(九十三段)。これは、名もなしに、無名という名前を、含ませたもの、であり、一見するに、何処にでも、ありそうな、会話で、あるが、清少納言は、「なほいとめでたしとこそおぼえしか」と、結んでいる。これも、中宮の動作の、故に、覚えた、感慨であろう。

又、村上天皇が、宣耀殿の女御(芳子)の、『古今集』の、暗記具合を、試している時に、途中で、休憩をする。「御草子夾算さしておほとごもりぬるもまためでたしかし」(二十三段)と、あり、草子に、夾算をさして、寝るといふ、動作も、めでたしと、讚美されている。この動作も、日常よくある、動作であり、取り立て、言う程の事もないが、天皇の動作故に、これも、「めでた」いのである。

更に、身分意識を、はつきりと、物語るものは、琵琶に寄せて、中宮定子の、美と才知とを、讚美した一段(九十四段)、である。

上の御局の、御簾の前で、殿上人が、一日中、琴や笛を、吹いて、遊びくらしした日に、中宮定子が、

琵琶の御琴をたたぎまに持たせ給へり。くれなゐの御衣どもの、いふも世のつねなる桂、また、張りたるどもなどをあまた奉りて、いとくろうつややかなる琵琶に、御袖を打ちかけて、とらへさせ給へ

るだにめでたきに、そばより、御額の程の、いみじうしろうめでたくけざやかにて、はづれさせ給へるは、たとふべきかたぞなきや。ちかくみ給へる人にさしよりて、「なかば隠したりけんは、えかくはあらざりけんかし。あれはただ人にこそありけめ」といふを、道もなきにわけまゐりて申せば、わらはせ給ひて、「別れは知りたりや」となんおほせらるる、とつたふるもをかし。(145頁)

この一節は、周知のように、『百明文集』の「琵琶行」の

猶抱琵琶半遮面 軸撥絃……

に、よつている。中宮の、額の辺の、白く美しい様子を、半ば、顔を、隠した女性と、比べて、のべたものである。その女性は、「たゞ人」であるから、中宮の、美しさには、及ばないであろうと、言っている。同じような、姿勢を、している、二人の女性を、比較する基準が、「たゞ人」で、あるか、否かと、いうことに、置かれている。

この事から、しても、清少納言の、優劣良悪を、決める場合の、判断の基準に、その相手の、地位、身分などが、大きく、は入り込んでいる。

おわりに

以上、小白河の八講に、おける、藤原道隆の服装に、ついで、清少納言の見方を、発端として、清少納言が、人物の、よし悪しを、判断する基準に、その人の身分に、関する意識(清少納言が、相手の身分を、どう、考え、評価しているか)が、は入り込んでいることを、述べた。特に、その中では、中宮定子を、中心として、展開する、中の関白家についての、讚美が、大きな比重を、占めている。それは、取りも直さず、彼女の、置かれている、条件を、雄弁に、物語っている。「宮にはじめてまゐりたるころ……」の段に、みられる、清少納言の、緊張も、一つには、自分の、置かれている位置と、相手の身分に、対する、負担から、くるものが、あろう。受領階級の出身という、境遇

は、除目に司得ぬ人に、ついで、描写の上に、よく、あらわれている。

更に、又、『無名草子』の中にある、次の言葉も、このように、考え進めてくると、改めて、理解できる。

その『枕の冊子』こそ心のほど見えて、いとをかしう侍れ。さばかり、をかしくも、あはれにも、いみじくも、めでたくもあることども、残らず書きしるしたる中に、宮の、めでたくさかりに時めかせ給ひしことばかりを、身の毛も立つばかり書き出でて、関白殿失せ給ひ、内の大臣流され給ひなどせしほどの衰へをば、かけても言ひ出でぬほどのいみじき心ばせなりけむ人の、はかばかしきすすも、なかりけるにや……

〈註〉

- ① 引用は「東洋文庫」(平凡社)で、近年、刊行されたものによつた。
2巻の76頁
- ② 引用本文は、岩波の、日本古典文学大系に、よつた。段数・頁数も、同書に、よる。
- ③ 古典文学大系『大鏡』によつて、頁数を、示した。
- ④ 『王朝貴族の病状診断』(服部敏良氏)では、道隆の病気を、糖尿病と、診断しておられる。(同書166頁)
- ⑤ 古典文学大系『栄華物語』巻三、105頁
- ⑥ 『大鏡』巻四、177頁
- ⑦ 更に、詳しく、本文を、示すと、次のようである。
主人下馬客在船、拳酒欲飲無管絃、醉不成歡慘將別、別時茫茫江侵月、
忽聞水上琵琶聲、主人忘帰客不発、尋声暗問彈者誰、琵琶声停欲語遲、
移船相近邀相見、添酒回燈重開宴、千呼萬喚始出来、猶抱琵琶半遮面、
转轴撥絃三两声、未成曲调先有情